中京大学　心理学部紀要
創刊号（2001）69 ― 78 頁

Social Cognition and Object Relations Scale 中京大学版（SCORS-C）評定マニュアル

文学研究科博士課程　関山　　徹

Rating manual for the Chukyo University version of the Social Cognition and Object Relations Scale (SCORS-C)

SEKIYAMA Toru（Graduate School of Letters, Chukyo University, Yagoto-honmachi, Showa-ku, Nagoya 466-8666）

This manual gives directions for rating of the Chukyo University Version of the Social Cognition and Object Relations Scale（SCORS-C）. The Social Cognition and Object Relations Scale（SCORS）, developed by Western et al.（1985）, is a multi-dimensional scale for assessing object relations through narrative data such as the Thematic Apperception Test（TAT）and interviews. Based on SCORS, and developed at Chukyo University, SCORS-C is designed to assess TAT responses only. SCORS-C consists of eight sub-scales, each evaluated on a seven-point rating system, and utilizes only eight TAT cards（1, 2, 3BM, 4, 8BM, 13MF, 15 and 20）. In order to evaluate the reliability of the scale, all TAT responses were scored independently by two raters, and an interrater reliability correlation was calculated. The intraclass coefficients obtained for the eight sub-scales ranged from 0.78 to 0.95.

Key words: object relations, social cognition, Thematic Apperception Test（TAT）

Ⅰ．はじめに

このマニュアルは，筆者が作成した Social Cognition and Object Relations Scale 中京大学版（以下，SCORS-C と略す）の使用方法について述べたものである。SCORS-C は，TAT 反応（8 枚分）を用いて被検者の対象関係を 8 次元から測定する評定尺度であり，研究目的での使用を前提としてつくられた。SCORS-C は次のような利点をもつ。その第一は，被検者の自己や他者との関わり方を，多面的に把握できる。第二は，段階評定方式をとるため，数量的な比較が可能である。第三は，TAT を使用するため，インタビュー等に比して施行条件を統制しやすい。第四は，他の TAT を用いた方法と比べると手続きが明確であるため，恣意的な評定を回避できる等の特徴をもつ。

Ⅱ．作成過程

SCORS-C の作成にあたっては，米国の Westen を中心とする研究者たち（Westen et al.,1985）によって開発された Social Cognition and Object Relations Scale（以下，SCORS と略す）を土台とした。Westen らは，対象関係論的な精神分析学と発達的な社会的認知研究の双方の知見を総合する立場から研究を行っており，投影法テストやインタビュー内容には，被検者の対象関係（精神内界に構成された，自己や他者との関係のパターン）が認知や情緒の過程までも伴って反映されると考えた。そして，彼らは次のような仮定のもとに SCORS を作成した。その第一は，対象関係を単一次元のものとしてではなく多次元的なものとしてとらえている。第二は，被検者の対象関係の各側面について，その発達水準を仮定している（但し，一部の尺度を除く）。以上の仮定は，SCORS-C においても継承されている。これまで SCORS は，特に人格障害（たとえば，Ackerman et al.,1999; Westen et al.,1990）や被虐待児（Orndoff & Kelsey, 1996）の対象関係を査定するために用いられ，一定の成果をあげてきた。なぜならその種の被検者は，健常者とも精神分裂病者とも異なる独特な対象関係をもっているため，SCORS の多次元的尺度はその複雑な様式をよくとらえることができたからである。

Westen らが開発したオリジナルな SCORS には，4 つのタイプといくつかの版が存在する。SCORS には TAT 用とインタビュー用があり，さらにそのそれぞれが段階評定方式（以下，SCORS-R と略す）と Q ソート方式（以下，SCORS-Q と略す）にわかれている。最初につくられた SCORS は，4 尺度からなる 5 段階評定方式の 1985 年版 TAT 用 SCORS-R（Westen et al.,1985）であった。その後 TAT 用 SCORS-R は，1995 年に 8 尺度 7 段階評定方式（Westen, 1995）に改訂された。その一方で Westen らは，より精密な測定を可能にするために Q ソート方式を導入にした。そして，1995 年には 6 尺度からなる TAT 用 SCORS-Q（Westen, 1995）が，1996 年には 9 尺度からなるインタビュー用 SCORS-Q（Westen,1996）がつくられた。以後，SCORS の改良は Q ソート方式を中心に行われ，SCORS-Q の改訂は現在も続けられている。

評定基準の設定にあたっては，1995 年版 TAT 用 SCORS-R を下敷きとした。なぜオリジナルなものを使わなかったのか。その理由は，1995 年版 TAT 用 SCORS-R は，概要しか公表されていなかったからである（TAT 用 SCORS-Q マニュアルの巻末にたった 1 ページ分だけ掲載されているにすぎなかった）。しかもその内容は，7 段階の評定基準のうち，奇数段階（レベル 1・3・5・7）についてしか記述されていなかった。これだけでは実際の評定を行うことは難しいため，専用の評定基準を整備する必要があった。また，Westen からの私信によれば，TAT 用 SCORS-R はマニュアルの整備が遅れているために当面は Q ソート方式のものを参考にするように，とのことであった。そこで，筆者は 1995 年版 TAT 用 SCORS-R を基本にしつつ，1995 年版 TAT 用 SCORS-Q と 1996 年版インタビュー用 SCORS-Q を参照しながら独自に評定基準を設定することにしたのである。したがって，SCORS-C は，SCORS 全体の純粋な日本語訳ではなく，TAT 用 SCORS-R を一部改変した亜型である。

ところで，筆者が 4 タイプある SCORS のうち，TAT 用段階評定式を選択した理由は以下の通りである。TAT 用かインタビュー用かという点からいえば，TAT の方が多面的且つ効率的に被検者の対象関係を把握できるからである。ロールシャッハ人間反応についての Blatt ら（Blatt et al.,1976; Blatt & Lerner, 1983）や Urist ら（Urist, 1977; Urist & Shill, 1982）などの研究で明らかにされたように，投影法テストにおける人間像についての言及と被検者の対象関係との間には強い結びつきがある。Westen らも既に指摘しているが，TAT 図版にはさまざまな対人関係場面についての明瞭な刺激が含まれているため，ロールシャッハ人間反応よりも情報量が多いと考えられる。また，条件や内容に偏りのないインタビューを行うためには，TAT の習熟に比して尋ねる側により多くの訓練が必要であると考えられる。次に，なぜ Q ソート方式を採用しなかったかについて述べてみたい。その理由の第一は，異なる様々な被検者集団を標本にする場合に，Q ソート方式がふさわしいか疑問があったからである。筆者としては，Q ソートのような相対評価よりも，絶対評価の方が望ましいと考える。さらに，SCORS-Q では，あらかじめ定められた配分と重みづけによって Q ソートするという手順がとられているが，それらの配分比や重みづけの値の妥当性についても疑問が残る。第二は，既存の SCORS-Q は改良の途上にあるため，現時点ではより確実な SCORS-R を使うことを推奨する，との Westen のアドバイスがあったからである。第三は，Q ソート方式の手順は煩雑すぎるため，実際の使用にあたっては評定者の負担が大きいためである。

SCORS-C の施行上の特徴としては，使用図版の枚数と種類を，図版 1，2，3BM，4，8BM，13MF，15，20 の 8 枚に固定した点があげられる。原法（Westen et al.,1985）では，図版の枚数について，最低 6 枚以上の使用を指示しており，8 枚から 10 枚の図版を用いることを推奨している。また，図版の種類について，原法は特に指示していない。筆者が図版の枚数と種類を固定した理由は，第一に，使用図版の共通化によって研究成果の結集をしやすくするためである。第二に，使用枚数を少なくすることによって評定に伴う労力を軽減させるためである。また，図版の選択基準は次の通りである。Hartman（1970）が選定した TAT 基本セット（basic TAT set）の 8 枚を土台として，その中の図版 6BM と 7BM を図版 15 と 20 に入れ替えた。その理由の一つ目は，図版 6BM と 7BM は，語り手の性別が特に反応に影響しやすい図版であるため，SCORS-C の評定値を異なる性別間で比較する場合に支障があるからである。二つ目は，1 人の人物が描かれた図版（以下，1 人図版と略す）と複数の人物が描かれた図版（以下，複数人図版と略す）の枚数を同じ（4 枚ずつ）にするためである。一般に，1

人図版はより自己の内面や自己像を投影しやすいと考えられている。SCORS-C では，他者像だけではなく自己像も含めた人間表象全体の特徴をとらえることを目指しているため，1 人図版と複数人図版の数を等しくすることにした。

Ⅲ．実施法

1. TAT の施行法

被検者と検査者が 1 対 1 で行う，対面法を基本とする。以下で特にとりあげていない点については，すべて鈴木(1997)に従った。

(1) 使用図版

使用する図版（評定の対象となる図版）は，図版 1，2，3BM，4，8BM，13MF，15，20 の 8 枚である。図版の提示順は，記述順に従って，図版 1 から始めて図版 20 で終わる。必要があれば，その他の図版を併せて施行してもかまわない。しかし，提示枚数や提示順は，評定の対象としない図版も含めて統制しておくべきである。特に図版 20 は，図版 19 での対人知覚の崩れの影響を受ける可能性を否定できないので，図版 20 の前に図版 19 を提示するか否かは統制しておいた方がよい。

(2) 教示と質疑

基本的には，その場面で何が起こり（現在），その前にはどんなことがあって（過去），この後どうなっていくか（未来）について，登場人物の思考や感情を織りまぜながら物語るように教示する。また，質疑は被検者の自発的な反応が完全に終わってから行い，教示の範囲を超える質疑は絶対にしてはならない。もし教示の範囲外の質疑があった場合には，それ以降の部分を評定の対象から外すべきである。具体的な教示内容や質疑の仕方は，鈴木(2000)を参考にするとよい。

(3) 記録方法

被検者が物語った内容は，筆記だけでなく録音装置も併用して正確に記録する。原法では，可能ならば音声だけでなく映像まで記録することを推奨している。評定に際しては，ワード・プロセッサーを介して作成された逐語録を紙媒体あるいは画面に出力したものを用いる方が望ましい。

2. 評定方法

(1) 評定者

評定はすべての反応について独立に最低 2 名以上で行う。原法によれば，評定者には，臨床心理学専攻の大学院生以上か心理士が望ましいとしている。実験者は，評定者の評定能力を一定水準以上を保つ必要がある。また，評定者は，評定にとりかかる前に，評定基準だけでなくその背景にある諸理論についてまでも理解しておくことが望ましい。そこで，評定者の訓練は次のように行うものとする。最初に，実験者は評定者に対して，各尺度の意味と評定基準を説明する。しかも，この説明は，各図版ごとに例題を使って説明しなくてはならない。次に，実験者は，評定者に対して練習問題を課す。練習問題はただやればよいというわけでなく，正答率が 9 割以上になるまで繰り返さなくてはならない。1 回分の練習問題の内容は，最低でも使用図版のすべて（すなわち全 8 枚）を含むものとする。また，正答率が合格基準に達していてもいなくても，実験者は，個々の誤答箇所について評定者が納得するまで説明しなくてはならない。

(2) 評定尺度

SCORS-C は 8 尺度から構成されている。各尺度の理論的説明は Westen（1991）で詳述されているためここでは省いた。評定作業では，8 枚の図版のそれぞれに対して 8 尺度で評定する。したがって，評定者は，1 人分の TAT プロトコルについて合計 64 個の評定を行わなくてはならない。また，各尺度にはレベル 1 からレベル 7 までの 7 段階があり，レベル数が増えるほどより成熟的な対象関係をもつとされ，逆に低いレベルほど未熟で不健康な対象関係をもつと仮定されている（但し，Affect 尺度と Self-esteem 尺度を除く）。特にレベル 1 は，全尺度において病理性の指標となっている。以下に，それぞれの評定尺度の特徴について述べる。評定基準については，付録を参照のこと。

A）Complexity 尺度

Complexity 尺度とは，「人々の表象の複雑さ (Complexity of representation of people)」尺度の略である。この尺度は，被検者の自己や他者を把握する仕方がどの程度分化しているかを測定する。

評定においては，登場人物がどのくらい複雑に描写されているかが問題となる。さらに心中の葛藤や人物間の軋轢についての描写があれば高めのレベルとなる。したがってComplexity尺度では，高いレベル値の被検者ほど自己や他者のとらえ方がより分化していると考えられ，発達水準が高いと仮定される。

B）Affect尺度

Affect尺度とは，「表象の情緒特性（Affective quality of representation）」尺度の略である。この尺度は，被検者が対人関係においてどんな情調の関係を予期あるいは経験しているかを測定する。すなわち，他者を悪意をもつ自分に脅威を与える存在としてみなしているか，それとも善意をもつ互恵的な存在とみなしているかについて測る尺度である。評定においては，登場人物が他の人物や環境から感じとっている情緒の色合いに注目する。注意すべきは，登場人物が自分自身にむけてもつ情緒については，Affect尺度ではなくSelf-esteem尺度で扱う点である。悪意や脅威を強く受けとった反応ほどレベルを低く，善意や好意を強く受けとった反応ほどレベルを高く評定する。つまり，低いレベル値の被検者ほど，対他者関係を悪意や敵意に満ちたものと見なしていると考えられる。但し，この尺度ではレベルの高低に発達水準は仮定されていない。

C）Relationships尺度

Relationships尺度とは，「対人関係への感情投入（Emotional investment in relationships）」尺度の略である。この尺度は，原法のCapacity for emotional investment in relationship and moral standards尺度が2つに分かれたものの一方である。Relationships尺度は，他者を手段としてよりも目的として扱う程度を測る。言い換えれば，被検者が他者と接する際に，感情の伴った関わりをどの程度まで深く行うかについて測定する。評定においては，登場人物同士の結びつきの度合いに注目する。低めのレベルでは，対人関係についての言及が乏しかったり，他者を単に道具として利用している。中程度のレベルでは，一定の感情を帯びた関わりが描写されている。さらに，高めのレベルでは，愛情などの肯定的な感情に裏うちされた相互交流が述べられている。したがって，高いレベル値の被検者ほど，他者理解を伴った親密な人間関係を営む能力があると考えられ，発達水準が高いと仮定される。

D）Morals尺度

Morals尺度とは，「望ましさと道徳規範への感情投入（Emotional investment in values and moral standards）」尺度の略である。この尺度は，原法のCapacity for emotional investment in relationships and moral standards尺度が2つに分かれたものの片方である。Morals尺度は，被検者がどのような基準や動機にもとづいて行為しているかを測るものである。評定においては，Kohlberg（1969）の道徳判断の発達段階（前慣習的水準・慣習的水準・脱慣習的水準）を参考にした基準を使って評定する。すなわち，登場人物の行動が，どのくらい道徳的価値と合致するのか，そしてそれがどのくらい内在化され脱慣習化されているのかを測定する。登場人物が欲求充足や興味のためだけに行動していればレベルが低く，道徳的価値を受容したりそれに応えるよう努力していれば中程度のレベルになる。さらに，ただ道徳的価値に従うだけでなく，主体的判断と思いやりにもとづいて問題に取り組んでいる場合には，高いレベルに評定される。したがって，高いレベル値の被検者ほど公正で他者への配慮のある対人関係の能力をもつと考えられ，発達水準が高いと推測される。

E）Causality尺度

Causality尺度とは，「社会的因果性の理解（Understanding of social causality）」尺度の略である。この尺度は，被検者が自他の思考や感情，行動の原因をとらえる際の精密さの程度について測定する。評定においては，登場する人物の心中や人物間で生じた出来事の因果関係についての説明が，どの程度の論理性や正確さ，複雑さをもっているかに注目する。低めのレベルでは，因果関係が破綻していたり，説明がなかったりする。中程度のレベルでは，複雑ではないが正確な描写がある。さらに，高めのレベルでは，人物間や個人内で生じた出来事について複雑で首尾一貫した説明がある。したがって，高いレベル値の被検者ほど，自己や他者の心の動きを緻密に理解する能力をもつと考えられ，発達水準が高いと推測される。

F）Aggression尺度

Aggression尺度とは，「攻撃衝動の体験と処理（Experience and management of aggressive impulses）」尺度の略である。この尺度は，自分自

身がもつ攻撃性を被検者がどのように体験して処理するのかについて測定する。この尺度は，原法に新たに追加されたものである。評定は，次のような観点から行われる。すなわち，低めのレベルでは攻撃衝動が無統制な形で表現されており，中程度のレベルでは攻撃性について特に問題となっていなかったり，攻撃性を否定的なものとしてだけとらえて直面化を避けていたりする。高めのレベルでは，自分自身の攻撃性を受容するだけでなく，それを社会的に許容される形や役立つ形（競争や適度な自己主張）で表現している。したがって，高いレベル値の被検者ほど，攻撃衝動を統制し生産的に利用できる能力をもつと考えられ，発達水準が高いと推測される。

G）Self-esteem 尺度

Self-esteem 尺度は，被検者が自分自身に与えている評価，すなわちセルフ・エスティームの高低を測定する。この尺度も原法に新たに追加されたものである。Self-esteem 尺度の評定においては，登場人物が自分自身にむけてもつ情緒の色合いを扱う。すなわち，自己を否定的な存在と見なしたり自己批判的な感情をもつ反応ほど低いレベルとし，自分自身について現実的で肯定的な感情をもっている反応ほど高いレベルとして評定する。したがって，低いレベル値の被検者ほど，自分自身への評価が低いと考えられる。但し，この尺度ではレベルの高低に発達水準は仮定されていない。

H）Identity 尺度

Identity 尺度とは，「自己同一性と自己凝集性（Identity and coherence of self）」尺度の略である。この尺度は，被検者の人格の統合の度合いについて測定する。この尺度も原法に新たに追加されたものである。評定においては，登場人物の同一性や主体性の高低が問題となる。低めのレベルでは，人物像は不安定で変動しやすい状態にある。中程度のレベルでは，人物は一時的な目標喪失状態にあったり，自己定義について特に問題にしていなかったりする。さらに，高めのレベルでは，目標や理想をもって自己投企していく人物が描写されている。特に，自己がばらばらに解体される感覚（断片化）や多重人格的な物語が述べられている場合には最低レベルとして評定する。したがって，高いレベル値の被検者ほど，よく統合された人格をもち将来にむかって努力する能力をもつと考えられ，発達水準が高いと推測される。

（3）評定値の集計

全ての評定が終わったら，尺度ごとに各図版（8枚分）のレベル値を合計してその平均値を算出する。また，これとは別に重篤な病理の指標として，全評定（64 個）に占めるレベル 1 の出現率（Level1%）を算出してもよい。但し，レベル 1 に該当する反応は，健常者においてもしばしば生じるため，若干数の出現をもって直ちに重篤な病理と見なすことは危険であり，その布置なども考慮して慎重に解釈するべきである。

（4）評定者間信頼性

各尺度の評定者間信頼性は，級内相関（intraclass correlation）を用いて算出するとよい。参考のために，筆者が別の研究目的で用いたデータにおける評定者間信頼性について述べる。このデータの被検者は，健常な大学生の女性 40 名（平均年齢 20.2 歳，標準偏差 1.8）であり，強迫傾向の高い者（20 名）と中程度の者（20 名）から構成されていた。筆者と臨床心理士 1 名が評定者となって独立に評定したところ，その級内相関係数は，各尺度において.78 から.95 までの範囲の値を示した（詳細は Table 1 を参照）。

Table 1　評定者間信頼性

尺度	級内相関係数
A) Complexity	.86
B) Affect	.79
C) Relationships	.94
D) Morals	.95
E) Causality	.88
F) Aggression	.93
G) Self-esteem	.91
H) Identity	.78

Ⅳ．おわりに

以上で示したことがらだけでは，充分なマニュアルとは決していえないだろう。今後は，具体的な評定例を示すなど工夫して SCORS-C をより使いやすいものにしていきたいと考えている。当然ながら，SCORS-C の信頼性や妥当性についてもさらに検証

していく必要がある。また，このマニュアルは，SCORS-C を研究目的に使う場合を想定して書かれた。臨床的な利用法の示唆としては，TAT 用 SCORS-R について紹介した赤塚・豊田（1994）の論文を参考にするとよいだろう。

最後に誤解のないように断っておくと，SCORS-C は，包括的なスコアリング・システムを目指すものではない。実際のところ SCORS-C は，被検者が与えた TAT 反応のうち，人間表象に関連したごく一部分しか利用できていない。SCORS-C の適用によって，TAT の各図版がもつ豊かなもち味が半減してしまうことは否定し難い。しかしながらその一方で，TAT がリサーチ分野においてもっと使用されてもよいのではないかという強い思いが筆者にはあり，あえてこのような評定尺度を作成した次第である。

【引用文献】

Ackerman,S., Clemence,A., Weatherill,R & Hilsenroth, M.（1999）Use of the TAT in the assessment of DSM-IV cluster B personality disorders. *Journal of Personality Assessment*, 73(3), 422-448.

赤塚大樹・豊田洋子（1994）Westen,D の TAT 解釈理論に関する研究．愛知県立看護短大雑誌，26，101-112.

Blatt,S., Brenneis,C. & Schimek,J.（1976）Normal development and psychological impairment of the concept of the object on the Rorschach. *Journal of Abnormal Psychology*, 85, 364-373.

Blatt,S. & Lerner,H.（1983）The psychological assessment of object representation. *Journal of Personality Assessment*, 47(1), 7-28.

Hartman,A.（1970）A basic TAT set. *Journal of Projective Techniques and Personality Assessment*, 34, 391-396.

Kohlberg,L.（1969）*Stage and Sequence: The Cognitive-Developmental Approach to Socialization.* Houghton Mifflin.［永野重史監訳（1987）道徳性の形成 認知発達的アプローチ．新曜社.］

Orndoff,S. & Kelsey,R.（1996）Object relations of sexually and physically abused female children: a TAT analysis. *Journal of Personality Assessment*, 66(1), 91-105.

鈴木睦夫（1997）TAT の世界――物語分析の実際．誠信書房.

鈴木睦夫（2000）TAT パーソナリティ――26 事例の分析と解釈．誠信書房.

Urist,J.（1977）The Rorschach test and the assessment of object relations. *Journal of Personality Assessment*, 41(1), 3-9.

Urist,J. & Shill,M.（1982）Validity of the Rorschach mutuality of autonomy scale. *Journal of Personality Assessment*, 46(5), 450-454.

Westen,D.（1991）Social cognition and object relations. *Psychological Bulletin*, 109(3), 429-455.

Westen,D.（1995）*Social Cognition and Object Relations Scale: Q-sort for Projective Stories.* Cambridge: The Cambridge Hospital and Harvard Medical School.

Westen,D.（1996）*Social Cognition and Object Relations Scale Q-sort（SCORS-Q）for interview and narrative data.* Cambridge: The Cambridge Hospital and Harvard Medical School.

Westen,D., Lohr,N., Silk,K., Kerber,K. & Goodrich, S.（1985）*Social Cognition and Object Relations Scale（SCORS）: Manual for Coding Data.* Ann Arbor: University of Michigan.

Westen,D., Lohr,N., Silk,K., Gold,L. & Kerber,K.（1990）Object relations and social cognition in borderlines, major depressives, and normals: a thematic apperception test analysis. *Psychological Assessment*, 2(4), 355-364.

［付録］Social Cognition and Object Relations Scale 中京大学版の評定基準

A）Complexity 尺度

この尺度は，被検者の自己や他者を把握する仕方がどの程度分化しているかを測定する。評定においては，**登場人物がどのくらい複雑に描写されているか**が問題となる。人物同士の区別さえ曖昧なものは最低レベルに評定され，人物の行為や外見的特徴についてだけしか述べていない描写は低めのレベルに評定される。心理状態や性格特徴について言及していると，中程度のレベルに評定される。さらに，心中の葛藤や人物間の軋轢についての描写があれば高めのレベルとなる。

レベル 1：登場人物たち同士が，**はっきりと区別されて描写されていない**。あるいは人物同士の**境界や視点が混乱**している。

【補足】（1）人物についてまったく言及のない場合は，レベル 1 とする。（2）複数の人物が，同じ状況や思考，感覚を共有している場合は，レベル 1 とする。（3）主人公等の主要人物についての説明に混乱があれば，他の人物説明で問題がなくてもレベル 1 とする。

レベル 2：各々の登場人物たちはそれぞれ別個の存在として描写されているが，**行為や外見的特徴**についてまでしか説明されていない。

【補足】（1）人物の内面的状態まで言及されていても，その内容が good と bad に splitting していたり，その両極間で流動的に変化している場合は，レベル 2 以下とする。（2）疲労や快苦等の単純な身体感覚は，レベル 3 の内面的状態には含めずにレベル 2 相当とみなす。

レベル 3：登場人物の**内面的状態**，すなわち**その時点での**感情や思考，欲求等について簡単に言及されている。

【補足】（1）人物の心理的特徴まで言及されていても，その内容が good と bad に splitting していたり，その両極間で流動的に変化している場合は，レベル 3 以下である。

レベル 4：登場人物の**心理的特徴**，すなわち性格や趣向，主義等のある程度**時間的安定性をもった**心的属性が描写されている。

【補足】（1）レベル 4 以上では，good と bad の両極が統合されていることが必須条件である。

レベル 5：登場人物の**心理的過程**や**人物間のやりとり**が描写されている。

【補足】（1）葛藤や軋轢についての言及があるとはいえステレオタイプあるいは不明瞭なものであった場合，レベル 5 とする。

レベル 6：登場人物の心中に**葛藤**を見たり，人物間に**軋轢**を見ている。

【補足】（1）葛藤や軋轢とは，個人内や人物間において，異なる態度や思考，感情等が相対立して併存している状態を指す。

レベル 7：葛藤や軋轢についてだけでなく，登場人物たち同士の**やりとりまでも**が具体的に描写されている。

【補足】（1）レベル 7 相当の葛藤や軋轢は，状況に依存するような一時的なものではない。

B）Affect 尺度

この尺度は，被検者が，他者を悪意をもつ自分に脅威を与える存在としてみなしているか，それとも善意をもつ互恵的な存在とみなしているかについて測定する。評定においては，**登場人物が他の人物や環境から感じとっている情緒の色合い**に注目する。悪意や脅威を強く受けとった反応ほどレベルを低く，善意や好意を強く受けとった反応ほどレベルを高く評定する。但し，登場人物が自分自身にむけてもつ情緒については，Self-esteem 尺度で扱うよう注意しなくてはならない。また，この尺度では，レベルの高低に発達水準を仮定していない。

レベル 1：**極端な悪意や脅威**に満ちている状況が述べられている。

【補足】（1）極端な悪意や脅威には，甚大な精神的あるいは身体的苦痛や，ひどい不作為（保護者や重要人物からの不注意や怠慢），根拠のない暴力・怒りも含む。（2）レベル 1 相当の悪意や脅威が，登場人物の空想あるいは映画や小説中の出来事として語られた場合でもレベル 1 とする。（3）レベル 2 相当の悪意や脅威が語られていたとしても，説明口調が過剰に辛辣で口汚い場合には，レベル 1 とする。（4）極端に残忍なものでない限り，演技や競争，試合等による殴り合いは，レベル 2 とする。（5）図版 8BM，13MF，15 で生じやすい平凡な悪意の描写は，レベル 2 とする。

レベル 2：**悪意や脅威**，あるいは**強い疑惑**が述べられている。

【補足】（1）悪意や脅威には，不作為を受けたり，深い失望・極端な不幸・ひどい孤独等への陥れが述べられている場合も含む。

レベル 3：**不快な状況**が述べられている。つまり，快い状態にはないが，直接に悪意や脅威にさらされてはおらず切迫していない状態にある。

【補足】（1）レベル 3 では，説明口調に辛辣さや激しさはない。

レベル 4：他者に対してもつ情緒の描写が，**特にない**もしくは**曖昧**である。あるいは，否定的なものと肯定的なものが併存して，**伯仲**した状態を述べている。

【補足】（1）否定的なものとは，悪意や脅威および不快な状況等を指す。また，肯定的なものとは，善意や好意等を指す。

レベル 5：否定的なものと肯定的なものが併存しているが，どちらかといえば**肯定的なものの方が優**

位に述べられている。

【補足】（1）肯定的と否定的な状況が伯仲していた，あるいは否定的な状況（予期）が優位にあったが，物語の結末で肯定的な状況が支配的になった場合，レベル5とする。

レベル6：**総じて善意や好意**を帯びたものが述べられている。

【補足】（1）善意や好意とは，肯定的期待や親切等を指す。

レベル7：**積極的な善意や好意**が述べられている。すなわち，全幅の信頼感や相互扶助，深い友好関係等が描写されている。

【補足】（1）積極的な善意や好意が現れていたとしても，他の人物が曖昧な存在だった場合には，レベル6以下とする

C）Relationships 尺度

この尺度は，被検者が他者と接する際に，情緒の伴った密接な関わりをどのくらい行えるかについて測定する。評定においては，**登場人物同士の結びつきの度合い**に注目する。低めのレベルでは，対人関係についての言及が乏しかったり，他者を単に道具として利用している。中程度のレベルでは，一定の感情を帯びた関わりが描写されている。さらに，高めのレベルでは，愛情等の肯定的な感情に裏うちされた相互交流が述べられている。

レベル1：**登場人物が1人だけ**であり，対人関係がまったく語られていない。

【補足】（1）図版1，3BM，15，20において登場人物が1人であった場合は，極端な反応でない限りレベル2とする。

レベル2：複数の人物を物語に登場させているにもかかわらず，登場人物たちの**関係づけがない**，もしくは**とても乏しい**。

レベル3：登場人物たちの関係について説明があるが，その関係は**一時的**ないし**偶然的**，**皮相的**な結びつきにとどまっている。

【補足】（1）映画やドラマ，夢の一場面が感情投入なしに述べられた場合は，レベル3以下とする。

レベル4：登場人物たちの結びつきはある程度**持続的なもの**であるが，その本質は**手段的な関係**の域にとどまっており，感情投入に乏しい。

【補足】（1）手段的な関係とは，一方の人物が他者を自分の欲求実現の道具として利用する関係である。単なる職業上や社会的役割上の関係は，この種の関係に含まれる。

レベル5：登場人物たちは他の人物を手段的存在としてではなく，**感情投入の対象**として関わっている。しかしながら，両者の関係は相互交流的ではなく，**一方通行的か単純**なものにとどまる。

【補足】（1）感情投入が述べられていたとしても，映画やドラマの中での出来事であったり，相手が誰か具体的でない場合には，レベル4とする。

レベル6：登場人物たちは**互いに共感的**な関係にあるか，**積極的な相互交流**をしている。

【補足】（1）両者に共感があり且つ相互交流があったとしても，ステレオタイプなものであればレベル5とする。（2）共感的な関係とは，愛情や友情等の肯定的感情投入である。

レベル7：登場人物たちは共感的な相互交流をしているだけでなく，**相互独立や敬意，他者理解を伴った**，持続的で親密な人間関係にある。

D）Morals 尺度

この尺度は，被検者が行為する際の基準や動機を測定するものである。評定においては，**登場人物の行動がどのくらい道徳的価値と合致するのか，そしてそれがどのくらい内在化され脱慣習化されているのか**を測定する。低めのレベルでは，登場人物は欲求充足や興味のためだけに行動する。中程度のレベルでは，道徳的価値をみとめたりそれに応えるよう努力する。さらに，高めのレベルでは，登場人物は，ただ道徳的価値に従うだけでなく，思いやりや熟慮にもとづいて行動する。

レベル1：登場人物は，自分自身の**欲求充足のため**だけに行動し，そのことによる**良心の呵責や罪の感覚をまったくもたない**。

【補足】（1）図版8BMと13MFにおいては，殺人や強姦等の犯罪が現れたとしても，これらの図版で生じがちな平凡な内容であれば，極端に残虐でない限りレベル2とする。（2）図中の人物（あるいは主人公）が一方的な被害者である場合は，レベル1相当の行為が行われたとしてもMorals尺度では扱わない。

レベル2：登場人物は，**損得や権威**を基準に行動したり，単なる**興味**に従って行動する。

レベル3：登場人物は，罰や社会的制裁を避けることを基準にして行動しており，**一応の道徳的価値の内在化**を果たしている。いわば，しぶしぶ道徳的価値に従う状態である。あるいは逆に，**過度の道徳的厳格さ**をもって行動する。

【補足】（1）この場合の道徳的価値には，倫理的正しさだけでなく，規範遵守，義務や職務の遂行，課題や勉学の達成，社会的望ましさ等も含むものとする。（2）レベル3には，著しく道徳的価値に反する行為ではないが，必ずしも道徳的とはいえない行為も含まれる（逃避的な行動等）。また，罪の意識のある軽い犯罪もレベル3に含まれる。

レベル4：登場人物は，道徳的価値に従うべきことは理解（**道徳的価値の受容**）しているが，そのことを**積極的に実践していない**。あるいは，道徳的価値について**特に問題になっていない**。

【補足】（1）道徳的価値を受容しいくらかの実践をしているが，積極性や具体性が伴わない場合は，レベル4とする。

レベル 5：登場人物は，道徳的価値と自分自身の行動が合致するように**積極的に努力**する。しかし，この努力は，道徳的葛藤や他者への配慮を伴うほど奥行きのあるものではない。

レベル 6：登場人物は，ただ道徳的価値に応えようと行動するだけでなく，その試みが**他者に影響を及ぼす可能性や，他の道徳的価値ないし慣習との兼ね合い**等について意識している。

レベル 7：登場人物は，さまざまな事柄に気を配りながらも**慣習にとらわれることなく，思いやりや熟慮**にもとづいて行動しており，それがそのまま道徳的価値に合致している。

【補足】（1）ここでの思いやりは，他律的なものではなく，心からのいたわりの気持ちや同情心でなければならない。また，ここでの熟慮とは，単なる知性化ではなく，抽象的思考を用いての主体的判断を指す。

E）Causality 尺度

この尺度は，被検者が自他の思考や感情，行動の原因をとらえる際の精密さの度合いについて測定する。評定においては，**登場する人物の心中や人物間で生じた出来事の因果関係についての説明が，どの程度の論理性や正確さ，複雑さをもっているか**に注目する。低めのレベルでは，因果関係が破綻していたり，説明がなかったりする。中程度のレベルでは複雑ではないが正確な描写があり，高めのレベルでは複雑で首尾一貫した説明がある。

レベル 1：因果関係が，**大きく混乱あるいは破綻**している。

レベル 2：**状況を叙述するだけ**で，出来事は環境や偶然によるものとしかみなされていない。

レベル 3：状況説明において**一応の因果関係**が述べられているが，その中身は単純な刺激-反応の関係である。

【補足】（1）説明に若干の不整合があっても，全体としておおむね了解できる程度ならばレベル 3 とする。

レベル 4：状況の因果関係について，ある**程度複雑にとらえて正確に**説明している。あるいは，そこでの行為の背後ではたらいている思考や感情の作用について簡単に述べている。

レベル 5：状況説明だけでなく登場人物の**心理的過程**についてまで言及している。あるいは，思考や感情の作用について複雑に説明している。

【補足】（1）心理的過程とは，思考や感情等の心の動きが経過していくみちすじのことを指す。

レベル 6：状況と心理的過程の両面についての説明があるばかりでなく，**一方の人物の行為が他方の人物に影響を与えている**様子が述べられている。

レベル 7：状況と心理的過程の両面について矛盾なく説明されているだけでなく，登場人物たち同士の行為や心理的過程が**相互作用しながら展開**している。あるいは，無意識的な心理的過程についての深い理解が述べられている。

F）Aggression 尺度

この尺度は，自分自身がもつ攻撃性を被検者がどのように体験して処理するのかについて測定する。評定においては，**物語中において攻撃衝動がどのように扱われているか**に注目する。低めのレベルでは攻撃衝動が無統制な形で表現されており，中程度のレベルでは攻撃性について特に問題となっていなかったり，攻撃性を否定的なものとしてだけとらえていたりする。高めのレベルでは，自分自身の攻撃性を受容するだけでなく，それを社会的に許容される形や役立つ形で表現している。

レベル 1：**他者に対する激しい攻撃性**，すなわち生命に危険をもたらすような強烈な怒りや破壊性が現れている。

【補足】（1）攻撃の対象が自己か他者かはっきりしなくても，激しい攻撃性が現れていれば，レベル 1 とする。（2）環境のすべてが激しい攻撃性に彩られている場合も，レベル 1 とする。（3）図版 8BM と 13MF においては，殺人が行われてもこれらの図版で生じがちな平凡な内容であればレベル 2 とし，極端な残虐性を帯びている場合にレベル 1 とする。

レベル 2：他者に対する**物理的攻撃**，すなわち，身体に危害を及ぼすような強い怒りや破壊性が現れている。あるいは，**自己に対する激しい攻撃性**が現れている。

【補足】（1）攻撃の対象が自己か他者かはっきりしなくても，物理的攻撃が現れていればレベル 2 とする。（2）自己に対する激しい攻撃性には，虐待を回避することの失敗や自殺が含まれる。

レベル 3：他者に対する**非物理的攻撃や弱い物理的攻撃**が現れている。あるいは，自己に対する物理的攻撃が現れている。

【補足】（1）非物理的攻撃には，中傷や呪詛，空想の中での残虐な行為，不作為等が含まれる。（2）弱い物理的攻撃には，物理的攻撃が行われるが失敗したり実害を与えていないもの等が含まれる。（3）自己に対する物理的攻撃には，いじめから身を守ることの失敗や自傷行為，自殺未遂等が含まれる。

レベル 4：攻撃性が**現れていない**，あるいは**特に問題となっていない**。

レベル 5：攻撃性を**否定的なものでしかない**とみなしている。

レベル 6：攻撃性を受容して，**社会的に容認される形**で表現している。

レベル 7：攻撃性を，適切な自己主張や競争等にかえて，**社会的に役立つもの**として発揮している。

G）Self-esteem 尺度

この尺度は，被検者が自分自身に与えている評

価，すなわちセルフ・エスティームの高低を測定する。評定においては，**登場人物がそれ自身にむけてもつ情緒の色合い**に注目する。自己を否定的な存在と見なしたり自己批判的な感情をもつ反応ほど低いレベルとし，自分自身について現実的で肯定的な感情をもっている反応ほど高いレベルとする。また，この尺度では，レベルの高低に発達水準を仮定していない。

レベル１：登場人物は，**自己自身について極端な否定的感情**をもっていたり，自己を**非現実的なほどに悪い存在**と見なしている。

レベル２：登場人物は，自己像について**恒常的**に否定的な感情をもっている。

【補足】（1）特定の出来事だけが原因であっても立ち直れないほどの自己像の傷つきを受けている場合は，レベル２とする。

レベル３：**一時的**に自己評価が下がっており，力不足感や劣等感等の自己批判的な感情をもっている。あるいは，非現実的に**誇大な自己像**をもっている。

【補足】（1）特定の出来事によって自己像の傷つきを受けるが回復可能な程度である場合は，レベル３とする。

レベル４：自己像について**特に問題になっていない**。あるいは，自己像について否定的感情をもっていたとしても穏やかで漠然としたものである。

レベル５：登場人物は，自分自身について否定的なものから肯定的なものまで**両方体験**できている。

レベル６：総じて**肯定的な自己像**をもっているが，具体性に欠ける。

レベル７：登場人物は，自分自身について**具体的かつ現実的な**肯定的評価を与えている。

H）Identity 尺度

この尺度は，被検者の人格の統合の度合いについて測定する。評定においては，**登場人物の同一性や主体性の高低**が問題となる。低めのレベルでは，人物像は不安定で変動しやすい状態にある。また，中程度のレベルでは，人物は一時的な目標喪失状態にあったり，自己定義について特に問題になっていなかったりする。高めのレベルでは，目標や理想をもつ主体的な人物像が描かれている。

レベル１：自己の統合が**極度に混乱**しており，断片化した自己の感覚をもっていたり多重人格的な状態にある。

【補足】（1）断片化した自己とは，自己がまとまりを失ってばらばらに解体される様子を指す。

レベル２：登場人物は**かろうじて**自己意識を保っている。しかし，普通の意識状態とはいえない状態にあったり，自己像が絶えず大きく変動している状態にある。

レベル３：登場人物はある程度の自己意識をもつが**受動的**にしか行動できないため，他者や環境に左右されやすく不安定な状態にある。

【補足】（1）自殺が述べられた場合には，レベル３とする。但し，自殺企図や自殺未遂までの場合には，レベル４とする。

レベル４：登場人物は**一時的に主体性を発揮できない**状態にある。つまり，目標喪失状態にあったり，本来の自分らしさを見失っているという感覚をもつ。

レベル５：同一性や自己定義は**特に問題になっていない**。

レベル６：登場人物は，**目標や野心**をもって行動している。

レベル７：登場人物は，将来の自己にむかって，理想を掲げながらも**長期的な計画や現実的な見通し**にもとづいて行動している。